

これからも米づくりを続けるために

自然界のつながりを人間が断ち切ることなく 環境に負荷をかけない心配りをしよう

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

佐渡で放鳥されたトキの雛のふ化が確認され、新聞などで雛の生育状況が連日報道されています。残念ながら雛が確認されたのは1組のペアの3羽だけですが、(その後、他の巣でも雛が確認された)人工飼育以外では雛の誕生は初めてです。中国からの協力があり、国を挙げての長い年月と膨大な費用や人智を結集した結果であり、佐渡の皆さんの協力も見逃せないのでしよう。久々の明るいニュースであり、関係者の皆さんのご苦労に敬意を表したいと思います。

だつたからこそ、国家事業として一連の取り組みがおこなわれました。しかし、失われかけている種はトキだけではなく、鎖の中ではトキは比較的上位にあります。トキの餌であるドジョウやカエル、昆虫類などが豊富に生存できる条件を再生できるかどうかです。それには、トキの餌であるドジョウやカエル、昆虫類の餌である小さな生き物や食草を十分に生育させることができない環境条件が必要不可欠です。自然界ではすべてがつながり、循環しているからです。



トキが生存する環境や条件づくりを担ってきたのは紛れもなく米づくりのための水田であり、森林やため池、用排水路などの米づくりのための関連施設などだったはずですが、その追いついてしまった責任の一端は私たち米づくり生産者にもあつたといふことが出来ます。もちろん私たち農家が自分たちの都合だけで勝手にそのような行為をやった訳ではなく、その時代の社会的な環境や条件など総体が、結果として農家にトキを追い込んでしまうような選択をせざるを得なくしてしまつたのだと思います。いずれにしても人間の生産活動や消費活動が他の様々な種を危険に追い込み、自然界のバランスを崩してしまつていくことは指摘されているとおり、現在では常識であり、その通りだと認めざるをえません。だから有機栽培でなければならぬなど短絡的なことを申し上げる心算はありませんが、農業を続けるためには可能な

限り環境に負荷をかけないような心配りだけは忘れたくないものです。さて、今年の育苗期間は好天に恵まれました。ただ、JAから受託したこしいぶきは、あまりにも気温が高くて通常の水やりでは間に合わず、水不足で葉をまいてしまうことが多く、追加のスポット水やりにも苦労しました。それにもかかわらず、出荷直前には第1葉が蒸れてしまいました。緑化後は裾を開け放しにして温度調節に気を配っていたのですが天候には勝てず、初めての経験でした。

4月27日に、久々に「エコ・ライス新潟」社におじゃましました。長岡は柏崎に比べて雪消えが遅かったはずですが周辺の水田はすっかり耕耘が終わり荒代の真っ最中で、作業の進歩は柏崎とほとんどいっしょで驚かされました。見える範囲のトラクタはすべて大型で、最新型のハローを装着していましたが、これが作業効率を良くしているのでしょうか。今年好天のお蔭で、我が家の小型のホイールトラクターでも沈没する心配もなく耕耘作業ができましたし、真っ白に乾いた水田に水を引き込んで快適な代掻き作業もできました。

田植えが終わればその年の「作」がほぼ決まってしまうと言われている気がします。もうしばらく気を抜かず、田植えが終わるまで頑張りたいものです。

(内山常蔵記)

